

ウィズコロナと一病息災

日野病院名誉病院長 井上幸次



2020年からのコロナ禍が終わって、世の中ではアフターコロナということが言われています。特に昨年5月から新型コロナウイルスがインフルエンザと同じ5類の感染症になって、そこで一区切りがついたことが大きい節目となっています。その後も幸い、大きな流行もないまま、時にはインフルエンザの流行に負けて(?)めだたなくなったりして、さしものコロナもその特別感を失っています。この4月からは保険診療上の新型コロナウイルスの特別扱いもなくなり、通常の臨床の一部に新型コロナウイルス感染が組み込まれたといえるでしょう。けれどもこれでコロナが完全に消え去ったわけではありませんので、私自身はアフターコロナという言葉よりも、ウィズコロナという言葉の方がよいのではないかと考えています。

ウィズコロナという言葉は、もともとはかなり政治的な所もあって、コロナ禍の真ただ中であって、感染対策をとりつつ社会経済活動をしっかり進めていくために言われるようになった(東京都の小池知事あたりが喧伝した?)ように思うのですが、感染の流行が終わった今こそウィズコロナという言葉をおぼえてはいけないのではないかと考えています。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とよくいいますが、私たちはあれだけ悪戦苦闘したコロナ禍時代のさまざまな経験を遠い昔のこのように忘れつつあります。ただ、コロナ禍前に比べて、日野のように高齢者の多い地方ではマスクをしている人が結構いますし、コロナ禍前よりは手指消毒をこころがける人は多いように思います。しかし、感染対策がより必要な、人の多い東京では、マスクをしている人が減って、コロナは「今や昔となりにけり」といった感があります。けれども、私たちは感染症の海の中で暮らしているようなものなのです。今はコロナ禍時代のように、人にうつすとその人が亡くなるかもしれない、とまでの心配をしなくてもよくはなりましたが、感染対策というのは自分のためだけでなく、周囲の人達のためにも日常的に行っておく必要があるということをおぼえてはいけません。そういう意味で、「コロナとともに暮らす」というウィズコロナの方がアフターコロナという言葉よりまさっていると思うのです。

話は変わりますが、一病息災という言葉があります。まったく病気がないよりも、一つくらい持病があった方が、かえって健康に気をつけて、長生きできる、ということです。実は無病息災という言葉ももちろんあって、文字通り病気がまったくなく健康なことなのですが、おそらく、こちらの言葉の方が先にあって、「いやいやそうではないよ」と疑問をもった(当時としては)少しへそ曲がりの人がこの言葉をつくったのではないかと考えています。寿命が短く、医療の発達していない昔は、持病をうまくコントロールすることもできず、持病をもつようになる前に亡くなる人も多く、無病息災が何といってもよかったです。今のように高齢化社会になってくると、なかなかそういうわけにはいかず、しかも医療が発達するといろいろな病気が判明しても治療や予防ができるようになり、むしろ無病息災で長生きする方がだんだん非現実的になってきています。さらに言えば、一病息災どころか多病息災といった方がよいようにもなりつつあります。そういう有病息災を支えていくには、総合病院よりもむしろかかりつけ医がひじょうに大事なのですが、両方の役割を担っている日野病院は、日野郡一帯の皆さんの生活を支える重要な屋台骨であり、まさに一院息災(これは私の造語です)と言えるのでしょうか。

私はこのウィズコロナと一病息災という二つの言葉には相通じる所があると考えています。感染症にしる、持病にしる、まったくない方がそれはそれでよいのかもしれませんが、実際はまったくないという状態はむしろ珍しいので、そのことをまったく忘れてしまうと、かえって大きな災厄を生むこととなります。私たちが病気と一緒に生きているということをつねに意識させてくれるこの二つの言葉を大切に、病気と上手に付き合って生活していく道を見出していくことができるとよいのですが。